

■■ 背戸の山 ■■

三河の私の郷里地方には「背戸の山と前畑」というたとえがある。これには種々の意味が含まれているが、一つには家としての最も大切なものを表徴したのである。いかなる事情があろうとも、背戸の山と前畑だけは、離しがたいものとしている。ところがこれはひとり三河の東部地方だけで言うことでなく、少し大げさであるが、日本中のどこにも通ずるたとえである。たとえば長崎県の壱岐の島などでも背戸の山と前畑を家勢の象徴とする風があって、ことに前畑が海のように広々としていることはその家の旺んな表れとして、羨望の的であった。

今一つ面白いことは、三河などでも前畑に女性的意味が含まれていたことで、一口に前畑を荒らされると言う、その家庭の紊^{ぶらん}乱を意味している。前畑に女性的の意味を考えることは、今でも東北地方などで、家の前畑を芋^お坪だの糸畑などと言って、そこには衣類の原料である麻を作り、しかもそれらは、すべて女性の管理に属していたことに関係がある。芋が女性を象徴する作物であることは、女子が生まれると、親が屋敷の前に芋を播く風が、関東の一部の地方にあり、伊豆の三宅島などにもその風があった。女の子が生まれると屋敷に桐の木を植えるなどの慣習は、おそらくこの芋を播くことから誘導されたのかも知れない。桐の木は筆筒の材料として、女には特に縁の深いものとしたのである。

これに対して一方の背戸の山には、特に女性とか男性的の意味があるかどうかは判らぬが、家として最も大切なものであった。日本の農村には、屋敷を囲む林に深い関心を持つ風があって、これを伐ることは、よくよくの場合でないとなさぬ。屋敷林に手をつけるようになれば、人間で言えばもう瀕死の境である。先年越後の高田在の村を訪うた折、その村のイグネ（屋敷林）がいかに貧弱なのに、この地方では屋敷林を大切にする風はないかと訊ねて失敗した経験がある。それと言うのが、私の質問に対する答えは次のようであった。「屋敷林を大切に思う感情は実は強過ぎるほど持ち合わせているが、ご覧の通りこの村はほとんど全部が小作人で、近来いろいろの災害や不景気続きで、大切な屋敷林まで手をつけねばやってゆかれぬ」、「屋敷林が貧弱なのは、要するに経済的に家々が行き詰っている証拠です」と、さんざんに暗い話を聞かせられて参ったものである。背戸の山は蓋しこの屋敷林の延長だったのである。同じ農村であっても山つきの地方であれば背戸に山を控えているが、平地林の場合はそんなものはないから、勢い背戸の山は屋敷林によって表徴されるわけである。

だから旧家を語る場合などに「屋敷林だけでも大したものだ」などという。事実二、三百年もの樹齢を持った屋敷林は経済的にも大きな底力を成していたのである。私の郷里などもそうであったが、長野県の山村などでも、背戸の山を俗にダイドコと言って、他の場所は伐採しても、ここだけは手をつけない。それで鬱蒼と古樹が茂っている。見ただけでも感じのよいものであった。しかし、時代がだんだん世知辛くなるに従って、屋敷林や背戸の山にことさら古木を茂らせておく者もだんだんに減って来た。したがって私などの見て来たものでも跡形もなく伐られたものが少なからずある。

この背戸の山や屋敷林の伐られることは、局外者から見れば格別のこともないが、当事者の場合だと、いろいろ問題や悲劇の種ともなっている。つい昨年も長野県のある村で、その旧家の背戸の山が伐られた。樹齢二五〇年という杉の美林で、価格三万円とか言われたが、その家の娘で他へ縁づいていたのがたまたまバスで村を通った。常ならばその林がバスの中からも一目に望まれるのだが、どうしても裸にされた山を見るに忍びなかった。轟く胸を抑えて、ことさら目を瞑っていた。見たくもあり見るのが怖ろしくもあり、考えればバカなことだと後で語っていたが、この種の感情があってこそ、永い間保存もされて来たのである。以前福島県の箭内名左衛門さんが『村』の誌上に発表された感想文の中に、家産を人格化して護るという言葉があったが、まさにそれであって、一種人格以上のものを感じて護持したのである。せめて伐る前に、写真だけでも撮っておきたいと言うのなども、その感情の現われで、当事者以外には判らぬ気持ちである。

背戸のやまの立派なものもあるが、屋敷林として見事だと感じたのは、富山県魚津在上野方村の盛永家であった。遠くから眺めても近づいて見ても、これをただの農家のイグネとはどうしても考えられない。神社の森にも珍しいほどのものであったが、最近聞いたところでは、供木として今まさに伐られつつあるとの話である。惜しいことだがこの重大時局であればそれもまたやむを得ない。ただしこの際失ってしまいたくないのは、樹木よりもこれに対する愛護の感情である。伐った後にも、さらに植えつけて愛護しようとの気持ちである。

これは決してたんなる感傷ではない。農家の屋敷林の伐採は問題ではないが、そこに茂る樹木に対する愛惜の情は、やがてわれわれ民族として、かなり重大なものだったはずである。

この大東亜戦で、日本の底力ということが頼りに唱えられる。ことに情報局で出した「見たか戦果知ったか底力」という標語などは、文字を見ただけで、まことに頼もしい満

足を唆すものであった。あの標語を見て、実のところ底力というようなことをはじめて考えた一人であった。しかし翻って顧みると、日本の底力として、もっとも具体的なものは何か——と胸に手を置いて考えると、いささか心淋しさが感じられぬわけでもない。もちろんそれらは枚挙にいとまないであろう。中にも国民の精神力などは、第一に挙げられるべきであろうが、そうした抽象的なものでなしに、最も具体的に、これだと思うものを取り上げると、即座に頭に浮かんで来ない。その点私などが、ひそかに信じている底力の一つは山林にある。否むしろこの国土を通じて特に有用の樹木が豊富にあることである。少なくともこれは挙げられてよい一つであると思う。巷間戦力の最後の決は、鉄量の如何によると言うが、その鉄量の保有となると、何としても遜色を感じざるを得ない。しかしその鉄を、ある程度以上補うものとして、木材の価値を忘れることは出来ない。代用品という言葉なども、ぴったりと当てはまるように思う。

今はまだ豊富にあるから、皆人さほどに感ぜぬのだが、これが仮にも支那やかつての朝鮮のように、日本の山々が裸であったらどうであろうか——。慄然と肌に粟を感じずにはいられない。如何に国民の志気が旺盛で、国内的に食糧の確保が出来たとしても、山に野に村に、また神社を繞り家を囲んで、樹木がなかったらどうであろうか。今頃はかなり苦しい立場におかれていなくてはならない。私は先年北支から蒙古を旅した時、あの目に入る限りの山々が、赤土の肌をまる出しにして、苔もろくろくなく、いわゆる涙痕の条々たるを見て、思わず吐息をついたものであった。そうして至る処に、日本側が建設を行っているのを見たが、その材料がことごとく日本内地のもので、ことに目につくのは木材であった。これを持たぬでは何も始まらないのである。私はその時持てる国日本を振り返って見た気がした。今まではそれほどにも思わなかったが、日本には山林がある樹木がある。如何に龐大な面積を誇っても、支那にはわれわれの目の届く範囲にはそれが無いのである。地下資源は豊富と聞いている。農産物もあるが、山に木がないことは何としても淋しい。持てる国と言うことは出来ない。もっとも日本でも、ここ半世紀前を回顧すると今は淋しくはなったが、しかしまだまだある。その点日本の富の中で、この山林、樹木の持つ力はかなり大きく評価されてよいと思う。時価に見積もって何程などという、そういう判断を超越した一つの逞しさである。

ところでその木材だが、今船材にしる飛行機にしる、あるいはその他の建築材料や坑木にしてもそうだが、樹齡三、四〇年から一〇〇年、一五〇年程度のものが要求せられている。それらは自然に古い株から芽をだし、あるいは自生したものもあるが、その一方に、われわれの父祖やあるいはそれ以前の人々が、丹精して植林し、また保護を加えて来た尊

い遺産である。この頃植樹デーなどで植えたものはまだ役に立たない。

これらに想到した時、われわれは山のおかげ、木材のおかげをもっともっと深く讃えてよいのではなかろうか——。もっとも日本は気候に恵まれ、その上にも土地肥沃で、至るところに樹木の繁る可能性はあるが、これとても濫伐ばかりで一方植林や保護を加えなかったなら、いつかはかつての朝鮮や現在の北支蒙古のように、裸になることは火を見るより明らかである。現に日本の中でも中国地方の一部などは、その点でかなり心細い状態にある。

ところでその植林と保護や手入れだが、もちろん古来から卓見の士がいて、大いに奨励もしたのだが、その意思をうけ継いで、黙々としてこれ努めていたのが、いわゆる林業家または農家のあるものであった。

山に樹のあることは何としても心強い。そうして見た目にも頼もしい。これに反して、裸山ほど淋しい荒涼たるものはない。これはわれわれ日本人の山に対して抱く気持ちだが、北支や蒙古の民にこの感情が判るであろうか——。地下の資源も頼もしいが、これは何としても後の補充が利かない。ところが樹木はそうではない。農業と同じで、手さえ加えて保護すれば、後から後から尽きることはない。

この頃燃料の不足が叫ばれるが、しかしこれは資源の枯渇ではなくて、輸送の不円滑というような別の原因もある。同時に需要が急激に増したこと、ことに石炭が薪炭に代わった額だけでも蓋し夥しいものがある。燃料のことから思い出されるのは、日本人の薪に対する気持ちである。われわれの伝統では、薪を豊富に持つことは、その家の富の象徴として、何よりの誇りであった。このことは古来樹木に恵まれていた国として一見奇異な現象であるが事実である。薪を豊富に持つことを、富貴の象徴とする気持ちなどは、近代教育を受けた人などにはもう判らぬかも知れぬが、屋敷を繞って、ギッシリと薪を積んだ家など、それがまたなく豊かな感じを与えたのである。数ある物資の中でも、薪などはおよそ詰まらぬもののように考えがちであるが、現時のような情勢となると、はじめて判るのである。薪を尊重するわれわれの伝統は、正月に宮中の百官が、御寵木としてそれぞれ薪を尊貴に奉った儀式を通しても窺がわれる。その遺風かも知れぬが、今でも交通不便な土地にゆくと、正月の進物の中に、かならず薪を加えている。平家の落人で有名な熊本県の五箇庄などでも、新婚の夫婦が親許への進物には、かならず薪の束を持ってゆくのである。しかもそこは国内で有数の山林地帯である。薪をめぐる民俗には、種々注意すべきものがあるが、ともかくもわれわれの樹木に対して抱いていた愛惜の、並々ならぬを語るもので

ある。家が木材で作られることもそれだが、その他神社や仏寺が、森林によって象徴されていたのも偶然ではない。森と言ひ林という語なども、そこに一種の蓄積感を持つことに特色がある。この種の隠れた伝統が、山を大切にし、樹木に対する格別の愛惜と尊重の根源であったことは否み得ない。屋敷林や背戸の山に、一種人格を感じた動機もまたそこに認められる。日本の底力の大きな一つとして、山林や樹木の豊富を願う時、その特殊の伝統を忘れることは出来ない。そうして樹木は伐っても、この伝統を伐って型なしにすることは防ぎたいのである。

かれこれ七年ほど前になるが、三重県一志郡の山林で、その村長さんと、植林家の性行について語りあったことがある。その村長さんも、代々山キチガイで通った家に育った人であった。樹を植えるということは、現実的な今の時世には合致しない。少なくとも遠い未来を見ているところにいわゆる山林家の尊いところがある。そうしてこれには、この頃一部の人々に唱えられる混木林の養成ではどこか物足りなさがある。少なくともあのスッキリとした杉の美林の持つ特色は、山林家の大きな魅力であった。これを脳裏に描くことによって、植林の現実性がある。金原明善や古橋源六郎翁の夢にも、そうした美しさが去来したことと思う。この点目前の利害ばかり考えたのでは、植林など出来るものではない。

それこれ考えるとき、今の供木運動の勧奨に携わる人、木材統制会社などのやり方には、植林家の自信を傷つけるものが少なくないらしい。この際伐って御用に立てることはもちろん結構であるが、ただそれだけではいささか心細い。ことに搬出の経費を逆算して価格を極める等のやり方では、交通不便の土地の植林の苦心などは、一顧の価値もなくなる。これでは如何に山キチガイでも植えようなどの気分は起きませんと、この間さる山林家がつくづく述懐していた。それと言うのが、材木屋と植林家とは、正反対な性行を持っている。早く言うと、大工さんと毀し屋のようなもので、一方が五〇年あるいは一〇〇年の将来を見越しているのに、一方はそれを伐って、利潤を得ることが目的である。あるいは伐って利用の途だけを考えている。もっともこの際は、永遠の策など考える時期ではなくて、目前の処理が大切だと言えればそれまでだが、逆にこの際将来の策を考えることも決して無意義ではない。むしろ最重要であることを強調したい。

このことから思い出すのは、一昨年であったか東京に東亜文学者大会が開かれたことがあった。その際故永田青嵐翁が、この苛烈な戦局下に、東京で東亜の文学者大会が開催されることは、思っただけでも愉快で、また日本の底力のいかに余裕があるかを物語るものだという意見を述べられた。もちろんそうした解釈も出来るであろうが、私などに言わせれば、そうした余裕を示す方法として、今一步を進めて、一〇〇年後の日本のために、建

設をやることも望ましい。それには今の学徒の奉公隊等に、大いに木を植える運動を薦めたい。この苛烈深刻な戦局下に、学徒が一〇〇年後の美林を脳裏に描きながら、黙々と木を植える光景などは、思っただけでも力強い限りである。ことに奉公隊の作業としては、下手な農事の手伝いなどよりは、植林または山の手入れは最も効果的であり確実性がある。今一つはこの際は国民全体が鈍重な神経を持つことが緊要であるが、それには抽象的な言葉による指導よりも、実際に太い神経を持つべく仕向けることが緊要である。爆弾の破裂した後に、静かに木を植える等は細い神経の持主などには、思いも及ばぬのである。

日本には未だに古木が豊富にある。そうして各地の古樹や名木誌の類を繙いても一目瞭然だが、それらはほとんど全部が信仰関係のものである。しかしその信仰たるや、かつては一片の迷信として片付けられ、困りもののように考えられたものに多い。事実山の神や賽の神の御神木が、今赤檜を掛けられて、ドンドン伐られているのである。これは見方によると、迷信が今日のために有用の材を保存していたようなものである。迷信は亡びても構わぬが、樹木の植え継ぎだけはやっておきたい。

わが国では山林や樹木の保護について、とかく風致のためとか、水利とか健康のためと言うが、そうした目的が、国民の一人一人に、植樹の関心を喚ぶ全部ではない。国家方針として書き立てれば、そうした結果にもなるが、この際は一人一人に、直接の利害関心に訴えてゆく道も考えたい。あるいは部落や村が主体になってやるようにするも望ましい。

今農商省で唱えている標準農家の培養等も、ともすると消極的な保護維持に関心が移りすぎる。どの道小さい限られた面積の運営とすれば、これをたんに譲るだけでは、何としても積極性が乏しい。現状以上に、もっともっと精力発揮の目標を持つことが必要である。それには私は植林以外には方法はないと思う。簡素質実な生活の護持にしてからが、最初からそこに諦めをおいたのでは意味がなさすぎる。大きな目的の上に結果として簡素質実たらしめる。それには少しでもある余裕を、何らかの形に吸収させてゆく。貯金も結構だが、農家にはピタリと来ぬ点がある。その吸収の対象は山に限る。要するに標準農家各個に見事な背戸の山を持たせて、そこを根城に、家と結んで譲ってゆく。個人的な家の永続のためにもまた、国家的に、資源の蓄積にも叶うのである。

そうして、この日本の国土の大部分が、耕地と都市を除く以外の地が、地上二、三〇メートルも樹木でギッシリ覆われたとすると、それは国土にさらに二階を付け出したものであり、あるいはまた膨れ上がったようなもので、その富源たるや測り難い。これこそほんとうの底力であり向上心でもある。将来世界を挙げて、どこにも乏しくなるであろう木材資

源を、極めて豊富に持つわけである。それと同時に、木材の利用についても、もっともっと研究と創意を働かせてゆく。鉄も大切だが、それ以上の価値を持たせて、木材時代を出現させる。飛行機は木製に限るとか、船材には木材が先決であるというところまでも、利用度を高めるべく努めるも一つのゆき方であるように思う。